

ポール・ゴーギャンの『マオリの古代信仰』 についての一考察

湯 原 か の 子

Réflexion sur *l'Ancien culte de mahori* de Paul Gauguin

筆者は1993年の夏、フランス滞在した折に、ルーブル美術館デッサン室に保存されている、ゴーギャンの『マオリの古代信仰』と『ノアノア』のオリジナル手稿、およびデッサン類を見る機会を得た。手稿は自筆原稿に、自らの手になる水彩や木版画の挿絵を入れて装丁したもので、何ぶんにも古く貴重な文献なので、一回しか見てはいけないという制限つきであった。一日目は『マオリ』を閲覽し、次の日に『ノアノア』を見ているうちに、『マオリ』で使われている挿絵が『ノアノア』にも多く使われていること、また前者では挿絵と内容が一致しているのに、後者では必ずしも関連性がないこと、に気づいた。そしてゴーギャンとタヒチの現地妻テハマナ、通称テフラとの牧歌的生活を描いた小説『ノアノア』は、実体験に基づきながらも、マオリ神話の影響下に脚色され創作された作品なのではないか、との感を強く持ったのである。両作品の比較研究をしたらさぞかし興味深いだろうと思ったのだが、後日、パリの国立図書館で『マオリ』の手稿（ルーブル所蔵）のファクシミリ版¹を見つければ、すでに編者のルネ・ユイグが「ノアノアを解く鍵」と題し、両作品の比較から前者が後者の源泉であることを論証しているのを発見して、いささかがっかりしたのであった。

しかしユイグは、『マオリ』と『ノアノア』で同じ挿絵が載っている箇所、両作品で同じ記述のある箇所、およびムーレンハウトの『オセアニア諸島紀行』²から『マオリ』へ引用された箇所、の各ページを一覧表として表示しているものの、その内容の分析や解釈はしていない。そこで本稿では、『マオリの古代信仰』の内容を紹介しつつ、ゴーギャンがマオリ神話の何に興味を抱き、どのように理解しようとしたか、またテフラとの経験は画家にとって何だったのか、両作品の比較検討から筆者なりに考えたことをまとめてみたいと思う。

1. マオリ神話のコスモロジー

『マオリの古代信仰』は、1891年から93年にかけての最初のタヒチ滞在中、友人から借りて読んだ『オセアニア諸島紀行』のなかから感銘を受けた箇所を引き写し、それに挿絵を入れて作ったノートである。厚紙の表紙には自筆でタイトルと絵が描かれ、背表紙には格子柄の布が貼ってある。構成としては以下の各章からなる。

- 天地創造（タヒチ語）（p. 1）
- そのフランス語訳（p. 9）
- 物質の永遠性（p.13）
- タアロアの語源（p.14）
- ティイの神殿（p.20）
- アレオイス結社（p.23）
- 考察（p.32）
- ルア・ハトウの伝説（p.36）
- 星の誕生（p.38）
- 天文学（p.41）
- 王の任命（p.43）
- テファトウの伝説（p.48）
- マオリの祈り（p.51）
- 断章（p.52）

『マオリ』のファクシミリ版は現在のところ絶版である。ゴーギャンの手紙や原稿の抜粋を集めた『オヴィリ』³には、『マオリ』からルア・ハトウの伝説、星の誕生、王の任命の章は入っているが、全文は掲載されていない。そこで、まず『マオリ』の冒頭部分、「天地創造」を翻訳して紹介することから始めたい。

＝天地創造＝

タアロアというのがその名だった。彼は虚無のなかにいた。地も、天もなく、人もいなかった。タアロアは呼びかける。しかし何者も答えない。ただ一人在り、彼は自ら宇宙となった。

軸はタアロアである。かくしてそう名づけられた。岩はタアロアである。かくしてそう名づけられた。砂はタアロアである。かくしてそう名づけられた。

このような断片から、物質および宇宙を構成するすべてのものが、聖なる神の部分を作っていたことがわかる。

タアロアは明りであり、種子である。彼は万物のもとである。彼は汚れなき者、強き者で

あり、宇宙を、聖なる大宇宙を造ったが、それはタアロア自身の殻にはかならない。宇宙に運動を与え、秩序を与えるのは彼である。「軸よ、岩よ、砂よ！我々は存在する。さあ、来たれ、地球を造るべき者たち！」(p.9)

タアロアは押しつけ、また押しつける。しかし物質たちは結合したがない。そこでタアロアは右手から七つの天を投げ、最初の基礎を作る。かくして光ができた。闇はもはや存在しない。すべてが明らかになった。宇宙の内部が輝く。神はその広大さにうっとりともみとれる。不動が止んだ。運動が始まる。使者たちの職務が満たされる。神託を下す者はその役を果たした。軸は固定した。岩はしかるべき場についた。砂は安定した。天は回転を始める。天は高くなった。海は深くなった。天地が創造された。(p.10)

タアロアは外なる女神(海)とまぐわった。彼らから黒雲、白雲、雨が生まれた。

タアロアは内なる女神(地)とまぐわった。彼らから最初の種子が生まれ、ついで、地上に増えるすべてのものが生まれた。ついで、山の霧が生まれた。ついで、強いもの、勇敢なるものが生まれた。ついで、美なるもの、心をそそる奇麗なものが生まれた。最初の人類の誕生である。彼らは自分たちは土から生まれたと信じた。

タアロアは空の女神オヒナとまぐわった。彼らから虹が生まれ、名づけられた。それから月明りが生まれ、名づけられた。それから赤い雲、赤い雨が生まれた。

タアロアは大地の内なる女神オヒナとまぐわった。彼らからテファトウ(大地に生命を与える神)、地下なる物音、中断されたる休息が生まれ、名づけられた。(p.11)

以下、同じヴァリエーションで、タアロア神と女神の結合から宇宙に存在するさまざまな自然、つまり神々が誕生したことが語られる。マオリの古代信仰はこのように自然の力を神の顕現として崇拝する多神教的自然宗教である。この点が、唯一の人格神をいなく啓示宗教であるキリスト教とは根本的に異なる。ゴーギャンはこうした古代宗教のコスモロジーに強い関心を持ったと思われる。

次に、少しとぶが、「考察」の章にゴーギャンの解釈が述べられているので、抄訳でその概要を見ておこう。

＝考察＝

すべての神は、さまざまな元素や天体など、自然の力の象徴である。主なる神は、能動と受動、心と身体、目に見えない精神的なものと可視的で物質的なもの、一言で言うなら、物質とそれに活力を与えるもの、という二大原因を作った。そしてこの二つの原理がともに神であり、宇宙を構成するあらゆるものがこの二原理から成り立っている。神の魂、生命、あるいは知的な部分をなすのが、タアロアという名で表される男性原理であり、神の身体をなす物質的な部分で、ヒナという名で示されるのが女性原理である。そしてこの両

者が、彼らの結合によって、宇宙に存在するすべてのものを構成するのである。(p.32)

以上からわかることは、マオリのコスモロジーでは天地創造が二つの原理、すなわち物質に運動を与える能動的で精神的な男性原理と、万物のもととなる物質的で受動的な女性原理との結合で説明されることである。言い換えれば、二つのエネルギーの融合と、それによって生みだされる運動によって、森羅万象、すべての天体の現象が説明されるのである。ゴーギャンがそうした古代人の考え方や解釈に強い共感を抱いていたのは間違いない。

なかでもゴーギャンが興味を持ったのは女性原理のヒナであった。次に、ページは前後するが、ヒナに関する箇所を見てみよう。

＝物質の永遠性について＝

テファトウとヒナ（大地の神と月の神）の対話

ヒナがテファトウにいった。「人間がその死後、蘇るようにしてください。」

テファトウが答えた。「だめだ。人間は決して生き返ることはない。大地は死し、植物も死す。植物によって養われている人間もまた死す。人間をつくっている土も死す。地球は死に、終るであろう。再び蘇ることはない。」

ヒナは答える。「好きなようにするがよい。私は月を蘇らせよう。そしてヒナが持っているものはすべて存在し続けるであろう。テファトウが持っているものは亡び、人間は死なねばならないであろう。」(p.13) (図1)

マオリのみならずアルカイックな文化では、満ちては欠け、欠けては満ちる月は、死と再生を連想させるところから、月の女神は、消滅しては再び蘇る、循環する宇宙の生命エネルギーを象徴する。ゴーギャンは上記のヒナとテファトウの対話をモチーフに、『ヒナとテファトウ』（1893）を描いている。それは何より、生命の循環生成のコスモロジーに対する画家の関心の深さを示しているといえよう。

ゴーギャンがマオリのコスモロジーとならんで強い関心を示したものに、アレオイスの密儀がある。次に、その摩訶不思議な未開宗教について紹介しておきたい。

2. アレオイスの密儀宗教

アレオイスというのは、オロ神を崇拝するマオリの密儀結社である。タヒチは西欧との接触の過程で、1797年にダフ号で到着したロンドン伝道協会などの伝道団によって急速にキリスト教化されるが、本来は多神教的な宗教をもっていた。それらの神々は氏族や首長国など社会集団の守護神として、あるいは一種の新興宗教の神として人々の信仰を集め、氏族や首

長国の頭領は創造神からの直系出自を主張し、現人神として君臨していたのである。

18世紀末のタヒチ島にはそうした首長国が乱立し敵対していたが、そのなかからタヒチ南西部にあるパパラ国のアライ・ラヒ（頭領）だったアモが全島統一抗争に勝利し、ポマレ王を名乗る。その息子のポマレ二世は来島するイギリス船に物資補給をする代わりに武器の提供を受け、ロンドン伝道協会の協力を背景にして強権的な政治を推進していく。当時のタヒチには、ソシエテ諸島のライアテア島から伝播した新興宗教のオロ神信仰が強い政治的影響力を持ち、キリスト教と対立していたが、ポマレ二世はロンドン伝道協会を後楯に反対派を押しさえ、1815年にポマレ王朝を樹立する。さらに1819年、自らもキリスト教徒となり、島民を強制改宗させて、タヒチは福音国家となる。それ以降、土着宗教は姿を消していくのである。⁴

さて、オロ神信仰は『マオリの古代信仰』でも紹介されるように、神と人間との聖婚を起源としてもつ。以下に訳出するのは、「アレオイス結社」の章の聖婚神話のくだりである。なおテキストにブタの記述がみられるが、ブタはタヒチの主要産物のひとつであり、ポマレ王朝の財政的基盤を作ったのも、ブタの貿易だったのである。

＝アレオイスとその結社＝

タアロアの息子オロは、人間のなかから妻を選びたいと思い、第一の天界であるテライ・ウエタイから、ボラボラ島にあるパイア山に降りてきた。ボラボラ島には彼の姉の女神、トゥウリとオアアオアが住んでいた。彼らはすぐに、アノウア・ノウアという虹をつたって霧のなかに降り立った。その虹は神が空においたもので、一方の端はパイア山に、もう一方の端は地上にかかっていた。オロは若い戦士、二人の女神は若い娘と、それぞれ人間の姿をとり、さまざまな島をめぐり歩いた。そしてあちこちで祭をしまわった。しかし無駄だった。オロはタアタの娘たち（人間の女性）のなかに、気に入った乙女を見つけることはできなかった。神々は嫁探しに疲れ、天に帰る準備をした。そのとき、女神たちは、ボラボラ島のヴァイタベでまれなる美貌の乙女がアヴァイ・アイアという入江で水浴びをしているのを見た。（p.23）（図2）

乙女に魅せられたオロは、姉たちに、自分はパイア山の女神の住処に帰っているから、そのあいだに乙女に会いに行ってくれと頼んだ。女神たちは乙女に近づくと挨拶し、美しさを誉め讃え、自分たちはボラボラ島のアヴァナウ地方の出身で、弟があなたと結婚したがつている、と告げた。（p.24）

乙女はヴァイラウマチという名だった。彼女は見知らぬ二人を注意深く眺め、言った。あなたがたはアヴァナウの人には見えません。でもかまいません。弟さんが若くて美しいアライ（頭領）なら、ヴァイラウマチは彼の妻になりましょう。テオウリとオアアオアはすぐにパイア山に帰り、弟にこの成行きを知らせた。彼はまた虹アノウア・ノウアにのって、

ヴァイタペに降り立った。そこで、彼はヴァイラウマチに迎えられ、彼女は果物をのせたファタと、豪華な布と極上のござでできた寝床を捧げた。(p.25)

オロは新妻に夢中だった。毎日、朝になるとパイアの山頂に帰って行ったが、夜になると虹ののってヴァイラウマチのもとに通ってくるのだった。彼は長いこと天界テライを留守にしていたので、弟のオロテファとオウレテファが虹をつたって天界から降りてきた。さまざまの島を探したあと、彼らはずいに、オロが妻と一緒にボラボラ島の聖なる木の木陰にいるところを見つけた。(p.26)

彼らはヴァイラウマチのあまりの美しさに、贈り物なしでは近づくことができなかった。そのため、一人は雌ブタに、もう一人は赤い羽に変身した。それからすぐにもとの姿に戻ると、そのブタと羽を持って新郎新婦に会いにいった。その夜、ブタは七匹の子ブタを産んだ。それは次のように分けられた。

- 神に捧げるための生贅のブタ
- アレオイスの赤帯のブタ
- 客をもてなすためのブタ
- 愛を讃える祭のためのブタ
- 種を増やすためのつがいのブタ
- 家で食べるためのブタ (p.27)

その頃、ヴァイラウマチは子を宿しオロに告げた。オロはすぐに二番目のブタをもって、ライアテアにあるヴァポア神殿、マラエにおもむいた。そこで彼はマヒという男に出会い、ブタを差しだし言った。このアレオイスのブタ、聖なるブタをおさめ、よく世話をみるように。オロはヴァイラウマチのもとに戻り、なんじは男児を生むであろう、彼をホア・タボウ・テライ（神々の聖なる友）と名づけるように、と言った。(p.28)

しかし、オロの時は来ていた。彼は彼女のもとを去らねばならなかった。オロはその時、巨大な火柱となり、ボラボラの最も高い山、プリレレ山の上までもくもくと昇って行き、そこで嘆き悲しむ妻と、驚愕する人々を残したまま姿を消した。

オロの息子は偉大な頭領で、人々に多くの善をなし、死後は父の住む天界テライ・ウエタイに昇ったという。またオロはヴァイラウマチも同様に昇天させ、彼女はそこで女神の列に加わったということである。(p.29)

ゴーギャンがアレオイスの神話に非常に興味を持ち、とりわけヴァイラウマチに関心を抱いたことは、『その名はヴァイラウマチ』（1892）などの絵画作品からもうかがい知れるのである。

ゴーギャンはついで、アレオイス結社はもともと十二の支部に分かれ、それぞれには頭領がいたとして、その名前と住処を紹介している。そしてこの密儀教団の風習が、以下のよう

に言及される。

アレオイス結社では売春が原則であり、嬰兒殺しは義務だった。頭領がアレオイスなら、その長男は生かしておかれた。残りは子供はすべて生贅に捧げられた。おそらくこうした嬰兒殺しは、後になって子供同士で生贅にしあったり、食いあったりすることがないように、誕生時に咽をかき切って殺した風習に源を発しているのだろう。

アレオイスたちは幾晩も幾晩も、夜通し、古くから伝わる呪文を唱えて過ごした。この呪文を翻訳するには、何年もの根をつめた作業を必要とするであろう。(・・・)

祭儀の職務は父から息子へと引き継がれ、息子のごく小さい頃から訓練を受けた。

神を喜ばせるには、人間の生贅が必要とされた。(・・・) (p.31)

ポマレ王朝では1819年に民法が施行され、生きたブタの丸焼きや嬰兒殺しによる家族計画など、西洋人からみると残酷で野蛮に思われる伝統的習慣が禁止されるとともに、宣教師の特権拡大がはかられたのである。

ここでは未開宗教の風習が偏見なしで紹介されているのだが、そのことはゴーギャンの心がマオリに対して開かれていたことを物語っているといえるだろう。

また首長国が並立していた時代には、頭領の権威を象徴するマラエと呼ばれる祭祀場が島のいたるところに建立され、その由緒の古さによって権威を誇り、規模の大小によって勢力を誇示していたのだが、そうした土着宗教の聖所や神像も、キリスト教化の過程でつぎつぎに破壊され廃墟となっていった。ちなみにタヒチ随一のマラエは、パパラ国のアモによって1796年に建立されたものである。このマラエは、石壁で囲まれ敷石で舗装された広大な境内と、その一端に立つ階段ピラミッド状の祭壇からなり、祭壇の基底部は広さ81.4×21.7m、階段は11段あり、一段の高さが1.2mという壮大なものだった。しかし、それも1865年に破壊の憂き目を見たのである。⁵

なお、タヒチがフランス保護領になったのは1842年、植民地になったのは1880年のことである。

次に、アレオイス結社の新しい長たる新王が着位する時の、これまた野蛮の趣に満ちた儀式を描いた興味深いくだりを訳出しておこう。

＝王の任命＝

新しい王は豪華な衣装をまとい、島のすべての高官に付き添われ、めずらしい羽飾りを被ったアレオイスの主要メンバーに先導されて、家を出た。一行はマラエに向かった。祭司は笛と太鼓で儀式の始まりを告げ、神殿に入った。神殿では神像の前に、人間のすでに死んだ生贅が置かれた。すると、王と祭司は歌祈りを唱え始めた。そのあと、主祭司は生贅の

人間に近づき、両目をくり抜いて、右目を神像の前に置き、左目を王に捧げた。王はそれを呑み込むかのごとく口を開くが、あらかじめ定められていたとおり、祭司はすぐにその左目を引っ込めて、もとの身体に戻した。

この儀式がすむと、神像は彫刻をほどこした御輿の上に置かれた。祭司たちが担ぐこの御輿に先導され、アレオイスの新しい頭領となった王は何人かの頭領たちのつくる肩車に乗って、家を出るときと同様に頭領やアレオイスたちをお供に、多くの民衆を従えて、聖なる丸木舟の置かれた岸辺に向かって行列していった。(p.43)

先導する祭司たちは、笛をならし、太鼓を叩き、神像の前で踊った。

この日のために花や木の枝で飾られた聖なる丸木舟のところに付くと、一行は神像を置いた。それから新王は衣装を脱がされ、大祭司に導かれて、真裸で海に入ってしまった。そこにはサメの神、アトウアス・マオがやってきて、王を愛撫し洗うのだと信じられていた。しばらくして王は大祭司のそばに戻ってきた。大祭司は王を助けて聖なる丸木舟に乗せ、その腰にはマロ・オウロウを、頭には王権の印であるタオウマタを巻き付けてやり、王を丸木舟の舳先に導いて民衆に示した。この光景を目にすると、民衆は長い沈黙を破り、四方八方から、繰返し繰返し、マエヴァ・アライ（王様万歳）！と叫ぶのだった。(p.44)

歓喜のこの最初の騒ぎがおさまると、一行はマラエから来た時に神像が置かれていた聖なる寝台に王を乗せ、来た時とほぼ同じ順序に従って、行列して王をマラエに連れ帰った。祭司たちは神像を、頭領たちは王を運んだ。来た時と同様、祭司たちは音楽と踊りで行列を先導し、民衆たちがそれに続いたが、今度は喜びに酔い、マエヴァ・アライ！マエヴァ・アライ！と叫び続けるのだった。

マラエに戻ると、神像は再び祭壇に安置され、そして祭は、荘厳さをひどく損なわせる、ある光景をもって終るのだった。神像のそばのござの上に置かれた王は、そこで民衆の最後の表敬といわれるものを受けるのである。それは驚くべき不潔さと粗暴な猥褻さに満ちた踊りと興行で、真裸の男女が王を取り囲み、自分たちの身体のさまざまな部分で王に触れようとし、しまいには王は彼らがこすりつけようとする糞尿にまみれてしまうのだった。

(p.45)

それは祭司たちがまた笛をならし太鼓を叩き始めるまで続いた。それが退去と祭の終りを告げる合図だった。すると王は、お供を引き連れて、宮殿に戻るのだった。(p.46)

古代の自然宗教の密儀は忘我や陶酔、あるいは性的乱行をとまなうのが常であり、こうしたオルギアは神と人間との融合を象徴的に意味するものだった。このような未開宗教のエロティックな密儀こそ、キリスト教が嫌悪し、文明化の過程でサタンや魔女の名のもとに排除していったものであるが、ゴーギャンは豊饒と残酷が入り混じる未開宗教の性的オルギアに、善悪を越えた原始的エネルギーを見ていたのであろう。

以上、『マオリの古代信仰』から主なくだりを紹介したが、次に『ノアノア』との関連関係について検討していきたいと思う。

3. 『ノアノア』の源泉としての『マオリの古代信仰』

『ノアノア』は1893年から95年にかけての一時帰国中に、タヒチを回想して執筆された小説である。ゴーギャンはタヒチの絵画を集めた展覧会を開催するにあたって、作品理解の助けになるようにと執筆を思い立ったのである。そして文章を書くのは本職ではないので、友人のシャルル・モーリスに、彼の詩を加えて共著で出版しようともちかけ、自分の原稿を手渡した。ところが友人の仕事がはかどらなかったので、タヒチに再出発する前に、モーリスが手を入れた原稿を写し直し、それをタヒチまで持って行ったのである。現在、ルーブル美術館に保管されているのはこの手稿である。このファクシミリ版は1937年、クレ・エ・シ社から出版された。

一方、モーリスは1897年に原稿の抜粋を二回にわたって、ルヴュ・ブランシュ誌に発表した。ゴーギャンはこれを不満とし、それ以上手を加えないように要請した。にもかかわらず、モーリスは1901年、ラ・プリューム社から共同名で『ノアノア』を出版したのである。モーリスが保管していたゴーギャンの初稿は、画家の死後、1908年に版画商のエドモン・サガに売却され、1954年、その娘のベルト・ル・ガレックによってファクシミリで限定部数、復刻された。さらに1966年、ジャン・ロワーズによる解説つきで、初稿の復刻版としてアンドレ・バラン社より出版された。1988年には、タヒチのゴーギャン美術館とニューヨークのゴーギャン・オセアニア基金の共同編集により、初稿に挿絵を加えたオリジナル復刻版が、マーグ社から出版されている。

ルーブル所蔵の手稿は、水彩や木版などの豊富な挿絵を含む300ページ近い大部な本である。本文は200ページくらいで、以下の章立てからなり、テハマナとの異国情緒香る生活を中心に、タヒチ滞在の思い出が語られる。

- 1章：夢想
- 2章：話者は語る
- 3章：画家
- 4章 話者
- 5章：詩人は語る
- 6章：話者一旅と結婚
- 7章：韻文詩
- 8章：ポリネシアの起源、アレオイス
- 9章：来るべき詩

—10章：魚釣り

—11章：帰国

残りのページは、ゴーギャンについての新聞記事やグラビアの切抜き、日本版画の模写や切貼り、などで埋められている。

このうち8章でテハマナからの聞き語りとして紹介される古代マオリについての言及が、ほとんどそっくり『マオリの古代信仰』からの引き写しなのである。タヒチがキリスト教化され、ゴーギャンが滞在した頃にはほとんど古来の伝統が残っていなかったことは前述のとおりである。ユイグやダニエルソン⁶によれば、古来、密儀は男の祭司が司り、特別な場合をのぞいて女性は聖所に入れない慣習だったので、年若いテハマナが古代信仰についての知識を持っていたとは考えられない、という。したがって、テハマナからの聞き語りというのはフィクションで、ほとんどの知識をムーレンハウトの著作に負っている、というのが事実と思われる。

『オセアニア諸島紀行』で感銘を受けた箇所を『マオリ』に書き写し、それをさらに『ノアノア』に引用しているということ自体、ゴーギャンの関心の強さを示すものだが、ここでもう一度、画家が未開文明の何に惹かれたのをまとめておきたいと思う。

『マオリ』の概観でも述べたように、タヒチの古代宗教では宇宙に存在するすべてのものが、タアロア神の聖なる部分であり、現れであるとされる。そして天地の創造、自然の生成や運動すべてが、相異なる二つの原理の結合であり、二つのエネルギーの交感によるものだ、と説明されるのである。そうして自然の力を崇拜し畏敬する自然宗教には、性やエロスに対するキリスト教的タブーも偏見もない。ゴーギャンはそこに、文明化によって去勢される以前の野性の力強さと豊饒なる性のおおらかさを、またある種の原初の幸福を見たのであろう。

このような原初の楽園も、本で読んだだけでは単なる知識に過ぎない。それを実際に生きさせてくれたのが、タヒチの娘テハマナだった。

イタリアの思想家フランチェスコ・アルベローニは、性愛によってかいま見える地平について次のように言っている。

私たちが愛する人は、美しく好ましいだけではない。この新たな世界に入り、強烈な人生に近づくための扉であり、それも唯一の扉なのだ。ものごとの究極の根源、自然、宇宙、絶対に触れることができるのは、愛するものがそこに導いてくれるからである。⁷

そのような意味で、テハマナはゴーギャンをマオリに導き、未開文明のコスモロジーをかいま見せる扉だったのである。彼女が言葉で古代信仰について語りきかせることがなかったにせよ、彼女のなかにはマオリの血が流れ、意識下には目に見えない文化遺産を継承している。存在そのものがマオリを体現しているのである。そして画家はテハマナという個人を通

して、マオリ文化の総体に触れることができる。だからこそ、テハマナはゴーギャンを失われた楽園に導く仲介者であり、楽園の伴侶たりえたのである。

さらに『マオリ』と『ノアノア』を読み比べると、アレオイスの起源についての神話（天界からやってきたオロ神と人間の乙女ヴァイラウマチとの聖婚、子供の誕生、オロの天への帰還）と、ゴーギャンとテハマナとの結婚および別離とのあいだに、モチーフの類似があることに気づく。オロとヴァイラウマチの聖婚が天界と人間界との融合なら、ゴーギャンとテハマナの結婚はヨーロッパ文明と未開文明との融合である。おそらくゴーギャンは自らの体験に、オロとヴァイラウマチの聖婚を投影していたのだろう。画家が帰国するとき、テハマナとの別離にそれほど苦しんでいないのも、オロの天界への帰還を思わせるものがある。だとすると、ゴーギャンにとってテハマナはヴァイラウマチにもあたり、画家は彼女によってアレオイスの神話を生きた、ということにもなるだろう。

このことをいっそう明確に示しているのが挿絵である。『マオリ』には計23枚の挿絵が使われている（そこにはゴーギャンのオブセッションを表すようなエロティックな絵も何枚が含まれている）。なかでも印象的なのは「アレオイス結社」の章、すなわちオロ神とヴァイラウマチの聖婚をめぐる挿絵である。そのモチーフとページ数を以下に示す。

- ボラボラ島でオロの姉妹がヴァイラウマチに出会う場面（p.24）
- オロとヴァイラウマチの新婚の床の絵：ベッドとテーブルにもられた果物（p.25）*
- その左上に、木の背後に潜む怪人物（p.25）*
- タヒチの自然を背景に大きな木の根元に座るオロとヴァイラウマチ（p.26）
- ヴァイラウマチに捧げられたブタとその子ブタたち（p.27）*
- 妊娠したヴァイラウマチの横向きの裸婦像（p.28）*
- オロの天界への帰還の場面：山あい立ち昇る大きな煙（p.29）

『マオリ』の23枚の挿絵のうち、11枚が『ノアノア』に転用されている。そのうち上記の「アレオイス結社」の章を飾る7枚の挿絵から、*印をつけた4枚が、それぞれ『ノアノア』（ルーブル所蔵）のp.77、p.73、p.63、p.157に転用されている。さらに「王の任命」の章には1枚の挿絵が使われているが、それも『ノアノア』に入っている。すなわち『ノアノア』に転用された挿絵の約半数にあたる5枚が、アレオイスに関する神話から採られているのである。このことは『ノアノア』に占めるアレオイスの影響の重要性を物語るものであろう。

「王の任命」の章の挿絵は、『マオリ』の最後を飾る水彩画（p.46）である。それは色鮮やかに咲き開いた花の花芯の上で交合する男女の絵で、生命の根源、宇宙を織りなす二つのエネルギーの交感を表すと考えられる。『ノアノア』（p.75）（図3）ではこの絡み合う男女の絵の下に、ひざを折ってうずくまり横たわる裸婦の版画が加えられている。これは胎児の姿勢であると同時に、ゴーギャンがよく描くペルーのミイラの姿勢でもあり、生と死を象徴すると解釈できる。こうして宇宙の生命の循環という主題がさらに鮮明に表現されている

のである。この絵こそ、ゴーギャンが『マオリ』から学んだものが何であったかを、端的に示していると言えるのではないだろうか。

以上の考察から、次のようなことが言えるだろう。すなわち、ゴーギャンはマオリの古代信仰を知ることによって未開文明のコスモロジーを知った。そして性愛も宇宙のいとなみの一つの現れであり、聖なるエネルギーの交感だと考えるにいたった、と。マオリの化身たるテハマナはゴーギャンに古代世界をかいま見せる仲介者だった。画家は彼女のなかに自らの想像世界のなかにあるタヒチを投影させ、テハマナとの性愛を、あたかもオロとヴァイラウマチをめぐるアレオイスの神話の再現であるかのごとくに生きた。いわばそれは彼にとって自らが属する文明圏とは別の次元の出来事だったのである。

フランスに一時帰国中、タヒチを追憶しつつ書かれた『ノアノア』は、テハマナとの実体験にもとづきながらも、『マオリの古代信仰』の影響下にフィクション化された作品である。こうして意識化された思い出は、想像世界のなかで生きられることによって実人生以上のリアリティを獲得する。ゴーギャンは『ノアノア』を作品化することによって、自らの実人生を神話化したのである。

〈註〉

- 1 : Paul Gauguin, *Ancien culte de mahori* (reproduit d'après le manuscrit de Gauguin, conservé au Musée du Louvre, Cabinet des dessins. Suivi d'une étude de René Huyghe: La clef de "Noa-Noa". Paris, P. Berrès, 1951)
- 2 : Jacques-Antoine Moerenhout, *Voyages aux îles du Grand Océan*, Arthus Bertrand, Paris, 1837. パリの国立図書館に所蔵されている。筆者も検討したいと思ったが、あいにく修理中で閲覧できなかった。
- 3 : Paul Gauguin, *Oviri, Ecrits d'un sauvage*, Folio/Essais, Gallimard, Paris, 1989
- 4 : タヒチの歴史に関しては以下の著書を参照した。
石川栄吉編『オセアニア世界の伝統と変貌』、山川出版社、1987
北大路弘信、北大路百合子『オセアニア現代史』、山川出版社、昭和57
- 5 : 高山純、石川栄吉、高橋康昌『オセアニア』、朝日新聞社、1992
- 6 : Bengt Danielsson, *Gauguin à Tahiti et aux îles Marquises*, Edition de Pacifique, Paris, 1988
- 7 : フランチェスコ・アルベローニ『エロティシズム』、泉典子訳、中央公論社、1993